徳島県立文学書道館 開館20周年記念文学特別展

追悼 瀬戸内寂聴

撮影／加治屋誠

2022年4月9日(土)～5月22日(日)

［休 館 日］ 月曜日（ただし5月2日は開館）
［開館時間］ 9：30～17：00
［会　　場］ 1階特別展示室・ギャラリー
3階収蔵展示室

［観 覧 料］ 一般 520(410)円
高校・大学生 360(290)円
小・中学生 260(200)円
※(　)内は20人以上の団体割引料金。高齢者(65歳以上)と各障がい者手帳をお持ちの方は半額。小・中・高校生は土・日・祝日は無料。

［主催］ 徳島県立文学書道館　［後援］ 徳島新聞社・四国放送・NHK徳島放送局

徳島市出身の作家で僧侶の瀬戸内寂聴は昨年11月9日、99歳で死去しました。あと半年で100歳でした。

自らの恋愛を描いた私小説や、自由を求めて闘った女たちの伝記小説など幅広いジャンルの作品を執筆し、51歳での出家後は、一遍・西行・良寛ら出家者を描き、75歳で「源氏物語」現代語訳を成し遂げ、84歳のとき文化勲章を受章しました。亡くなる直前まで「書くことは生きること」とペンを離さず、新聞や雑誌に連載を持っていました。

出家者としても、忘己利他（もうこりた）の精神で人々の悲しみに寄り添い、法話を続け、岩手の古刹・天台寺を復興し、終生、平和活動に力を尽くしました。

本展では、そうした寂聴の稀有（けう）な生涯を紹介するとともに、湾岸戦争終結を祈願した断食や、薬を持ってイラクを訪れるなど、命がけの活動も取り上げます。また生前最後の原稿や、筆記用具、愛用品、着物、水彩画や色紙、木彫の観音像なども展示して、美意識が高く多趣味であった故人を偲びます。

＜絶筆となった原稿＞

「卵焼きの思い出」（2021年10月14日付朝日新聞掲載、『寂聴 残された日々』所収）
この原稿を執筆した直後に入院し、寂庵に帰ることはなかった。

＜寂聴の代表作＞

『場所』
（2001年　新潮社）

『美は乱調にあり』
（1966年　文藝春秋）

『夏の終り』
（1963年　新潮社）

『瀬戸内寂聴全集』
1期　1～20巻（2001～02年）・2期　21～25巻（2022年刊行予定）　新潮社

関連イベント

■講演会「寂聴さんと私」　講師／井上 荒野（作家）
4月23日（土）14:00～15:30　＊申込必要（先着100人）

■解説と朗読「寂聴の愛と別れ」
解説／竹内 紀子（当館学芸員）
朗読／斎藤 礼子（MIKI朗読会代表）
4月30日（土）14:00～15:00　＊申込必要（先着40人）

■寂聴原作人形浄瑠璃「モラエス恋遍路」上演
太夫・竹本 友代　三味線・鶴澤 友輔　人形・とくしま座
5月15日（日）14:00～15:00　＊申込必要（先着80人）

寂聴の水彩画　「自転車」

自作の俳句を揮毫した寂聴の短冊
「御山のひとりに深き花の闇」

井上荒野さんと瀬戸内寂聴（天台寺で）
斎藤ユーリ撮影

井上 荒野（いのうえ・あれの）
作家。1961年東京生まれ。89年「わたしのヌレエフ」でフェミナ賞を受賞し、デビュー。2004年『潤一』で島清恋愛文学賞、08年『切羽へ』で直木賞、18年『その話は今日はやめておきましょう』で織田作之助賞を受賞。19年に寂聴と父・井上光晴、その妻をモデルにした小説『あちらにいる鬼』を刊行。近著に『そこにはいない男たちについて』『生皮　あるセクシャルハラスメントの光景』などがある。

交通アクセス（JR徳島駅から）

■徒歩　約15分
JR徳島駅西側のポッポ街を抜けて右折。踏切と助任川を越え、3つ目の信号交差点を右折して約300m。徳島中学校東隣。

■バス
［徳島市営バス］ 7番乗り場「川内循環線（右回り）」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。
［徳島バス］ 2番乗り場「前川経由」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。

■タクシー・自動車　約5分
国道192号線、藍場町交差点を北進。助任川を越え、4つ目の信号を右折して約300m。

■駐車場
当館北側にあります。（43台、大型バス2台）

イベントの申込方法
はがき・FAX・メールのいずれかにイベント名、郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、年齢、電話番号をご記入のうえ、お申し込みください。当館1階受付でも申し込めます。

言の葉ミュージアム
徳島県立文学書道館
〒770-0807 徳島市中前川町2丁目22-1
TEL 088-625-7485　FAX 088-625-7540
Eメール　kotonoha@bungakushodo.jp
ホームページ　http://www.bungakushodo.jp